
犬鬼人隨想録 ~蒼き牡丹外伝~

皆麻 穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬鬼人隨想録 ～蒼き牡丹外伝～

【NZコード】

N9061X

【作者名】

皆麻 兎

【あらすじ】

「里見ハ犬伝」の主役とも言える八人の犬士達。

彼らは、一人の少女との出会いで、それぞれの旅に多くの可能性を持ち始める事となる。その名は三木狭子。^{みききょうじ}500年以上先の未来から来たという彼女は犬士達と旅をし、最終的には犬塚信乃と結ばれる事になる。一方で、犬士達に限らず、彼女の周囲に現れる人物にも何かしら影響を与える事となる。

これは、犬士を含むいろんな者達が、彼女とかかわった事を思い出し、それを記した記録であった

これは、2011年6月に完結した『ハ犬伝異聞録
蒼き牡丹』の外伝をまとめた作品です。

プロローグ（前書き）

はじめましての方もいるかもしません。

作者の皆麻 兎と申します。

この度は、『犬鬼人隨想録』（蒼き牡丹外伝）にアクセス戴き、誠にありがとうございます。

当作品は、完結した『ハ犬伝異聞録 蒼き牡丹』の番外編を収録した作品となっています。

『蒼き牡丹』では主人公である現代の女子高生・三木狹子の視点で描かれましたが、当作品は、同作品に登場した里見のハ犬士や、それ以外の登場人物の視点で物語が進んでいきます。

視点は章ごとに変える予定ですので、宜しくお願ひ致します。

また、当作品は『蒼き牡丹』を犬士達の視点で一部描いたりなど、多少のネタバレがあります。

『蒼き牡丹』をご一読されていない方は、そちらの方を先に読まれてからこちらを開くのが良いかと思われます。

プロローグ

「現在^{いま}つて…何年?」

今でも思い出せる、その娘の第一声。

某

犬塚信乃成孝^{いぬづかしのもりたか}は、諱我^{こが}におわす足利成氏^{あしかがしげうじ}公に

仕官するため、故郷・大塚村から旅を始めていた。

その娘と出逢つたのは、道中で通つた円塚山^{まるつかやま}での山中。道端に倒れていた娘を初めて目にした時、ひどく驚いたのをよく覚えている。

「浜路^{ひのぢ}?！」

異風の体に尼のよつな髪。見た事のない装束を身に着けていたのに
も驚いたが、何より印象的だったのは…故郷に残してきた許嫁・浜^は路^{まじ}と顔がうり一つだという事実だつた。

その後、その娘とは諱我へ着くまでの道中を共に旅して一日別れる事となる。名は三木狹子^{みききょうし}といい、姓を持つからにはどこかの武家出身の姫かと思いきや…本人が申すには、500年以上先の世から來たといつ。

諱我までの道中は、あまりに目新しい出来事が多くてよくは考えていなかつたが…この狹子との出会いが、己の生き様を大きく変える運命的な出会いにならうとは、当時は全く想えていなかつた某であつた

プロローグ（後書き）

いかがでしたか。

このプロローグでわかる通り、最初は犬士の一人・犬塚信乃の視点で物語を進めていきます。なので、第1章か彼の章といつたかんじ？ 今後の展開として考えているのは、犬飼現八編や犬江親兵衛、悪役だと暮田素藤辺りのを考えています。

それと、本当の意味で言える”番外編”として、『蒼き牡丹』のキーパーソンであつた少年・染谷純一の物語も書きたいな」とか考えてます。

…それを実行に移せるのかはわかりませんが…

本業も忙しいので、こちらは少しづつ更新していこうかと思います！ さて、次回から第一章に当たる『犬塚信乃編』になると思いますので、よろしくお願ひします（＾＾）

第1話　”先の世から来た娘”と出会つて（前書き）

この第1章では、八犬士の一人・犬塚信乃の視点で話を進めます。

第1話 “先の世から来た娘”と出会い

「まこと、あの女子は肝が座つておる……！」
某が部屋に入ると、小文吾が妹の沼蘭殿とそのような会話をしていた。

「おお…信乃！」

こちらに気が付いた彼は、屈託のない笑顔を見せる。

許我へたどり着いた某は成氏公に謁見をするが、あらぬ疑いにより追われる身となってしまう。芳流閣で死闘を繰り広げた男・犬飼見八と共にその場から川に転落し、流れ着いた先は利根川付近にある町・行徳。そこで宿を嘗む犬田小文吾と沼蘭の兄妹に助けられる。しかし、匿つてもらつてからまもない頃に、某は生死の境をさまよつっていたのだが

「何故、あの娘は某を救つてくれたのであるつか…？」

某は隣部屋の襖を見つめながら呟く。

「誰かを助けるのに理由がいるのか？”…だそうだ」

「見ハ…？」

部屋の壁に寄りかかりながら、見ハが一言呟く。

「わしが“破傷風にかかつた貴様を何故、救おうとするのか”と問うたら、そのような答えが返ってきたのじゃ

「助ける…理由？」

「左様。おそらく…あの娘にとつて、死にそうな命を救う事は、人の子として当たり前と考えてるのやもしれん」

「人助けが当たり前…」

その言葉は、普通であつて普通でない。

…戦のないという時代から参ったからなのか…。それとも…？
某は狭が申していた台詞の真意を考えていた。しかし、今思えば…
彼女の純粋でまっすぐな精神ゆえの言葉だったのだと実感ができる

のである。

そしてこの会話から数時間が経過した後、狭が目を覚まし、某や現ハこの時はまだ“見八”けんぱちと名乗つたおつた若者。そして、小文吾や妹である沼蘭殿は、大法師おほしと名乗る出家から、己らが持つ宿命の話を聞くこととなる。この行徳へたどり着くまでの間、法師殿は狭と共に旅をしてきたという。また、狭となぜ行動を共にしていたかも語ってくれた。

「…では、拙者はこれにて」

「法師様！お気をつけて…！」

その翌日、行徳を出る前に我らは法師殿の出立を見送った。ただし、某と見八は許我じがでの一件でお尋ね者となってしまったので、法師殿の見送りは小文吾と狭がしていた。

「狭子殿を宜しく頼みます…か

「?どうした、信乃？」

「…いや」

古那屋の入り口付近にいた某に、現ハが声をかけてくる。我ら3人は、法師殿から託されたという事もあり、狭子と行動を共にする事となる。今まで女子おなじを連れての旅をした事がなかつたので、この先はどうなるかと考えていた。

浜路はまじ…。息災であるうか…

それと同時に、故郷である大塚村に残してきた許婚・浜路の事を考えていた。おそらく、狭の顔があの娘と瓜二つ故に思ったのかもしれない。

「ん…?」

気がつくと、現ハが深刻そうな表情をしながら、周囲を見渡している。

「現ハ…どうしたの？」

見送りから戻ってきた狭が現ハを見て、不意に声をかける。

「…お主か」

狭の存在に気がついた彼は、我に変えたような表情で口を開く。
「何やら、誰かに見張られているような気がしたのだが…。どうやら、気のせいのようじゃな」

フツと横目を向いた現ハだつたが、すぐにいつもの表情に戻った。
「相変わらず、お主は仮頂面のままじやのうー少しは信乃を見習つたらどうだ?」

「…余計なお世話だ」

何事もなかつたような顔で話す小文吾の台詞に、少し不快だったのかそっぽを向いてしまう現ハ。

そんな彼らに複雑そうな笑顔を見せる狭。それでも、某にとつては一時の安らぎともいえる時間であつた。しかし、この時に現ハが感じ取つていた気配の正体を、この後の旅で知ることとなるのであつた

「あれは…!?!?」

この台詞を某が口にしたとき、視界に入ってきた光景に驚いていた。己に義兄弟であり、4人目の犬士・犬川莊助いぬかわそうすけよしゆう義任を迎えるために大塚村付近へ我々は向かつた。そこで彼が牢に繋がれた話を聞き、助け出すためにと数日をかけて情報収集を行つていた。その最中、拠点としていた場所で狭や現ハが謎の輩に襲われる。

「信乃! あれは、狭子ではないか!!?」

この時、共に偵察へ行つていた小文吾が、ある方向を指す。

「!?!?」

群青色の髪をした忍びと刃を交える現ハを目の当たりにした某は、その少し離れた所に、白髪の男と共にいる人物 狹の後姿
が目に入る。

我らのいた場所は彼らから少し離れていたため、何を話しているのかは聞こえない。しかし、彼女の後姿を見る限り、狭は白髪の男に右腕を掴まれているようであった。

「狭！？！」

すると、男は右手で狭の首筋に一撃を加えて気絶させてしまう。

右腕だけが吊り上げられている状態になってしまった彼女を、己の右腕で抱えようとする白髪の男。

「…つ！？」

この事態を某と同時に、現ハも気がついていたと思われる。しかし、彼は別の敵と戦っているため、狭の所へはなかなかたどり着けない。「このままでは狭が攫われる」と直感した某は、敵の元へ走りながら、脇差・桐一文字を抜いた。

キィイイン

刀と刀の交わる音が山林中に響く。

その後、何とか狭が連れ去られる事なく、その場は収まった。

「狭…！どこも怪我はないか…！？」

敵が去った後、地面に座り込む狭の側に駆け寄る某や現ハ。

「“純一”を知っている”…つて…どういひ…」こと…？」

「狭…？」

当の彼女は、某達の声が聞こえていないらしく、よくわからぬ台詞を呴きながら呆然としていた。

…よほど、怖い想いをしたのだな…

某は無意識の内に、狭の肩に右手を添えていた。その時、彼女の身体が小刻みに震えていたのを感じたからである。

「…兎に角、移動するぞ。小文吾、有力な情報は得られたのだろうな？」

「ん…？ああ！じゃあ、この場を移動してから、俺らが得た情報を話す！」

状況を察したのか、刀を握る右腕を押さえていた現ハが小文吾に声をかけ、某達と狭はその場を後にする。

「…これから、永い語りとなるでしょう。それは、私が人の子では

ない…“鬼”といつ生き物だからです

「！？！」

この台詞は、荒芽山あらめやまで出会つた老女・音音殿おとねが申した台詞である。莊助を助けた後、次なる犬士・犬山道節忠いぬやまとしつただともとを迎えるため、白井へと向かつた。その道中で彼の仇討ち騒動に巻き込まれ、関東管領・扇谷定正おひがいがやさだまさの家臣達と刃を交える事になる。その後、単節ひとじやくと名乗るくの一の手引きで、音音殿と出会つ事となる。

彼女は狭が“先の世から來た娘”である事を知つていたらしく、神靈と成られた伏姫様の事や、己おのらを含む“鬼”的存在について語つてくれた。

あの時、狭さわを連れ去ろうとしていた白髪の男…。あれが墓田權頭ひきたけんのかみ素藤もとふじというのか…

この時、そのような事を某は考えていた。また、それと同時に、何故に彼女を連れ去ろうとしていたのか…その真意がますますわからなくなつてしまつた。

この後、残る犬士を探すため、3つに別れて旅を再開する事になる某達。その内訳は、下野国に現ハと狭子。そして某が向かつ事に。次に武藏国へは、莊助と小文吾。新たに仲間となつた道節は独り、許我こがへと情報収集のために向かつた。

この時は許婚を失つた悲しみでそれどころではなかつたが…これまで以上の謎とその答えが、その先の旅で待ち受けていようとは、微塵も思つていなかつたのであつた

第1話 “先の世から来た娘”と出会い（後書き）

いかがでしたか。

本編では第2章～3章の間をスピー・ディーにまとめたかんじです！　ちょっとまとめすぎたかなとも思いましたが、狹子が素藤らに襲われている所をずっと狹子以外での視点で描きたかったんで、ここを描けたのはよかったです。

同じ物語でも、視点を変えるとこんなにも違つんだと実感。笑

さて、物語の方ですが…

実は、話の中に出でた信乃の脇差・桐一文字とは、実際に原作（『南総里見八犬伝』）でも彼が使用していた刀。ただ、この時はまだ名刀で有名な村雨丸を持っていなかつたので、この脇差を使つたという次第になります。

さて、次回は本編では第4章辺りの所からスタートします。ここからだんだん深くなるであろうと思いますので、原作との違いを見せながら書いていきますんで、よろしくお願ひします（＾＾

今作品は外伝となりますので、作品としてはさびしいかもですが、宜しければご感想を戴ければ幸いです。

よろしくお願ひします！

第2話 深まる謎と降りかかる危機（前書き）

ここで大角を”角太郎”と書いていたりもしますが、後者は大角の幼名みたいなものなので、決してスペルミスとかではありません。
念のため、お知らせします。

第2話 深まる謎と降りかかる危機

荒芽山での一日が終わり、我らは3つに分かれて犬士探しの旅を再開する。下野国へ向かう事となつた現ハ・狹子・某の3人は、道中…上野国と下野国の国境にある集落・猿石村で一宿取る事と相成つた。

村にたどり着く前に狹が妙な事を申していたが、その日の夜…泊めて戴いた村長の家にて、思いもよらぬ出来事が起こつたのである。

「信乃様…」

「…！」

風呂からあがつたため、黒い髪が半渴き状態の狹。

そのいくらか艶っぽい彼女の口から、普段は口にしないような申し方で、某の名を呼ぶ。

…何か様子が変だ…。それに、狹は某の事を“様”づけで呼ばないはずだし…

「…！」

一つの可能性が頭に浮かんだ某は、驚きの余り後ずさりをする。

「お主…まさ…か…？」

某は恐る恐る、村雨丸の柄に触っていた利き腕を外しながら、狹に近づいていく。

「信乃様…。私です…大塚村の浜路…です…！」

「…！」

まさか、誠に…！

狹の口からこの台詞が紡ぎだされ、その瞬間…某は、彼女の肉体に何かが取り憑いている事を悟る。しかも、それが、己の亡き許嫁・浜路だという事をずつ早くなつていく。

「信乃様…！」

狹子の“中”にいる浜路がそう叫んだ直後、某に向かって走り寄つてきた。

浜路……！！！

この時、一瞬、狹の顔が浜路と重なる。そして、己の胸に飛び込んできた彼女を強く抱きしめた。“身体は違えど、この感覚はまさに浜路である”

「私……ずっと……信乃様にお会いしようと『やれこました』……」

某の胸の中で、浜路が涙を流す。

それを見た途端、今まで抑えていた気持ちがあふれ出してきた某は、狭の背中に腕を回して、ギュッと強く抱きしめていた。

「このまま、^{時間}時間が止まつてしまえばいいのに……」

肉体は狹子だが、浜路を抱きしめている感覚に陥っていた某は、すっかりそのような事を考えていた。しかし、今にして思えば……この行為がどれだけ狹子を侮辱し、苦しめていた事か

それについては、今でも後悔している。

「ぐつ……！」

この出来事が収まつた後 普段は無愛想で感情を表に出さ

ない現ハが突然、某の頬を殴つた。

その勢いで、地面に転げ落ちる信乃。

「何をする……！？」

何故殴られたのかが解らず、鋭い視線で某は現ハを睨みつける。

その隣の部屋では、浜路に取り憑かれたせいで疲れて倒れた狹子が眠りについていた。

「……ふん。死んだ女の事を、いつまでも引きずりおつて……！」

「何！？」

逆上しようとした某を見た現ハは、ため息交じりで再び口を開く。

「まあ、お主がどここの女を想うのは勝手やもしけぬが……」

「……？」

その直後、周囲の空気が変わったような感覚に陥る。

「お主は先ほどの出来事で、狹が取りつかれながらも、意識があつた可能性を考えなかつたのか！！？」

「えつ……！？」

その台詞を聞いた途端、某は身体を硬直させる。

「それに…お主の態度がどれだけ狹につらき想いをさせているか…」

朴念仁たるお主には、解せぬであろうな……！」

「…」

まるで某を殺さんと言わんばかりの形相で、現ハは怒鳴りつける。これだけ必死の彼を見たのも初めてだつたが…何より、浜路の事を想い、落ち込んでいた自分と、そんな己に側にいてくれた狹の事を思うと

己が情けなく感じるようになる。

「…確かに、現ハの申す通りやもしれぬな…」

やつと、自分が殴られた理由を悟る。

“申し訳ない”という気持ちがいっぱいになつた某は、すぐさま眠りについている狹の元へと歩き出したのであつた

このような出来事があつた後、下野国へ入つた某達は、返璧の里で6人目の犬士・犬村大角礼儀(いぬむらだいかくまさのり)と出逢う事となる。最初、庚申山で化け猫と対峙した某達はその後、大角の父・赤岩一角殿の亡靈から、化け猫が一角殿に成りすまして、大角：この時は角太郎と名乗つていた彼や彼の妻・雛衣殿(ひなきぬ)にひどくあたりちらしている事を知る。

「どんなに…どんなに…無念であつた事か…！！」

父親の骨を握りしめながら呟く大角の瞳には、大粒の涙が流れていった。

狹や雛衣殿の活躍もあつて、某達は一角殿に化けた化け猫を退治する事に成功する。しかし、これによつて永遠に父を失う事となつた大角は、悲しみの余り、地べたに座つて嘆いていた。その光景は…

幼き頃、母・手束たつかを失つた時の己にそつくりであった。

「うう……」

周りを気にせずに泣き続ける大角を見た狭は、自分の事のように涙を流し…現ハも、少しつらそうな表情で見下ろしていた。

「角太郎殿には、俺たち兄弟がついている…。これが、その証じや

…」

静かな口調で語る信乃は、大角に「礼」の文字が浮き出た水晶玉を渡す。

その直後、自身の懷から「孝」の字が出る玉を取り出して、彼に見せた。

このような悲しき別れ等がありながらも、某達の犬士探しの旅は続く

その後、狭子が持つ能力・千里眼（＝遠くの物や、本来なら見えぬ物も見える能力）によって武蔵国へ向かつた莊助達の現状を把握したり、道中で九尾の神狐・政木狐との出会いもありながら、某達は、武蔵国・穂北で一度再会を果たす事となる。

狭の持つ千里眼にも驚きだが、彼女に対する謎は深まるばかりだ。そもそも、巫女の家系でもなしにそのような能力を持つはずもないし、道筋を探す時に見せた蒼き光など…彼女に対しては、解せぬ事が多い。また、各々の情報を共有する中、蒼血鬼（＝血を食らう鬼の事）・墓田權頭素藤や足利公や関東管領の裏で暗躍する妖しき尼僧・妙椿らの名も耳にする事となる。

そんな中、穂北へ向かう途中ではぐれた7人目の犬士・犬坂毛野胤いぬさかのたね智を迎えるため、鈴茂林すずのもりへ向かう事となる。向かつたのは某・莊助・小文吾・現八・大角・道節と狭を含めた7人。犬士も毛野を含めて、あと2人という所までうまく事が進んでいた。

しかし、その鈴茂林にて、新たな戦いと思わぬ危機が待ち受けていた。

「はつ……！」

「ふんっ・・・・・！」

林中は一つの戦場と化していた。

叢に隠れて、毛野と彼の父上を手にかけたという籠山逸東太縁連が一騎打ちを繰り広げる中…某達には、墓田素藤に仕える蒼血鬼・牙静と、妙椿の刺客と思われる黒ずくめの者達の襲撃に遭う。

素藤から狹子を連れてくる命を受けていた牙静という男は、すぐさま彼女を捕らえようとするが、某が間に入る事で戦いの火ぶたが切られる。この漆黒の着物をまとった敵は、刀を使わずに戦う丸腰状態だが、鬼であるせいか、某の一撃も見事に防御してくる。

「妙椿と手を組んだり、狹を狙つたり…。お主達の真の狙いはなんなのだ！？」

「残念ながら…。その真意は素藤様しか存じません」

某の猛攻にも、平然とした表情で対応する牙静。

その後も戦いが続き、両者一步も譲れない状況となっていた時だった。

「やめてええっ・・・・・！？」

「！？」

突然、少し離れた場所から狹子の叫び声が聴こえる。

「ぐあっ…！」

それに反応した某は、その一瞬の隙を突かれ、腹部に強い衝撃が走る。

同時に、その勢いで近くにあつた木まで蹴り飛ばられ、激突する。

「くつ…」

地面に座り込んでしまった某を見下ろす牙静。

とどめを刺されるかと思いきや…彼の視線は別の方へと向いていた。

「ふ…。こんな時に、背中ががら空きとは…。初めて相まみえた時と同じで、隙だらけの娘ですね…」

「……？」

そんなことを呟いていた牙静は、不気味な笑みを浮かべていた。

「ま…て…！」

その後、敵は狭のいる方へゆっくりと歩き出す。

立ち上がり追いかけようとしたが…先ほどの攻撃で頭をぶつけたせいか、立ちくらみを起こして、思うように身体が動かせない。腹部が痛く、今にも気絶しそうな某だった。

「信乃さん！－！」

「莊助…！」

その数分後、意識が少しだけ飛んでいた某は、莊助に名を呼ばれて我に返る。

身体がふらふらしながら顔をあげてみると

妙椿の刺客を退治した現八らの前に、牙静が立っていた。

しかも、奴の腕の中には…締め上げるようにして捕えられた狭の姿が。

「ああ…あつ！…！」

彼女は某の状態に気が付き、敵の腕から逃れようと試みたようだが、逆に腹を締め付けられる事で、尚更逃れられない状況に陥ってしまう。

「狭つ…！…！」

その苦しそうな表情を見た途端、焦りと憤りを感じた某は、思わず彼女の名を叫ぶ。

意識が朦朧とする中、敵は狭が持つといつ“三世の姿”の話や、此度の件が妙椿の命令でもある事などを語る。そして、某達の元を去りとした時にこちらに向けて腕を伸ばそうとする。

「信乃…！…皆…！…！」

某の瞳に、泣き叫ぶ狭子の顔が映る。

「狭つ…！…！」

彼女の元へ行こうと必死に腕を伸ばそうとするが

敵は

狹子と共に姿を消してしまつた。

「くそつ…！」

莊助の肩を借りて立ち上がつた某は、絶望と自責の念に包まれていた。

「守る」と決めたのに…なんというザマだ…！！
悔しさの余り、拳を強く握りしめる。

「…おい…」

気が付くと、我ら犬士達の前に、籠山逸東太を倒した毛野が現れる。頬に返り血をつけた彼の手には、狹が持っていたお守り刀と、牡丹花の紋が刻まれた鞘が握りしめられていた。

「貴様らが隠れていたのは薄々勘付いていたが…。今は兎に角、あの女子が連れ去られた所以を説明してもらおつか…！」

そう話す彼の表情は、かなり深刻そうだつた。

後で本人から聞く事となるが…どうやら彼は、狹のおかげで命を救われた。そして、親の仇討を成せたらしい。しかし、それもあって逸東太が連れていた牙静に隙を突かれて捕まつてしまつたため、「自分にも責任がある」と感じて必死のようであつた。

しかし、敵の真意がわからぬ某達は、そんな彼の疑問に答えられず黙り込んでしまう。

「若」

「…曳手か…」

我らが黙り込んでから、いくらか時間が経過した後
道筋の近くに、彼や音音殿おとねに仕える忍び・曳手殿ひくでが姿を現す。
彼女の登場は、微妙な空気になつていた某にとつては、一種の救いであった。

「…如何した？」

「…“さるお方”からの命にて…若や皆様をお迎えに上がりました」

“さるお方”…？」

その遠回しな言い方に、首をかしげる大角。

そんな彼に気が付いた曳手さんは、眉一つ変えずに口を開く。

「…それは、安房国を治める殿・里見義実様でござります」

「…？」

「突然の呼び出し、応じてくれて大義である」

「ははーっ

その後、曳手殿と共に、某達一行は、行徳へ向かつた。小文吾が営む宿・古那屋にて、義実公との初対面と、大法師様との再会を果たす。

挨拶が済んだ後、法師殿の口から里見家が窮地に立たされていると、いつ現状などの説明があったが、話はすぐに、狭子への話題へと移る。また、行徳に着くまでの間、毛野には莊助や現八の口から、何故鈴茂林にいたのか等の経緯を説明していた。

「何…？ 狹殿が連れ去られただと…！？」

「はい…」

某の口から、狭が攫われた事を聞いた法師殿は、目を丸くして驚いていた。

しかし、妙だったのは、その後ろにいた義実公も、ひどく驚いていた事である。それから、莊助や大角が事の経緯を彼らに口頭で伝えた。また、義実公が毛野に直接声をかけて、狭が所持していたお守り刀を見せたりした後 法師殿の口から、衝撃的な事実を知らされる。

「貴方がたが今日まで旅をし、“狭殿”と呼んでいたお方こそ…鷹に攫われて行方不明となつていた、里見の五の姫・浜路姫様なのです…！」

「なつ…！」

法師様の台詞に、某達犬士は、驚きの余り言葉を失つてしまつ。「狹子が…里見の姫…！…？」

某は、とても信じられないような表情で、その言葉を口にする。

しかし、その台詞とは裏腹に…今まで狭に対して腑に落ちない事が、全部一つにまとめた

んな感覚も覚えた信乃であった。

そ

第2話 深まる謎と降りかかる危機（後書き）

いかがでしたでしょうか。

今回、『蒼き牡丹』の狭子視線では描ききれなかつた部分を存分に書けた気がして、大満足しています
なので、内容も密度が濃かつたかも…

さて、第1章である信乃編は、3話構成でいくつもりでしたが…このままうまくまとまるのだろうか?という、不安もあり(汗)でも、構想がゾクゾク浮かんでるので、頑張ってまとめていこうかと思います!

「」意見・「」感想等があつましたら、宜しくお願いします(^-^)

第3話 守るための戦い

「狹子が里見家の姫である」という驚愕の真実を、われら犬士達は法師殿の口から知らされる。初めは言葉を失つていたが、これまで腑に落ちなかつた出来事が一つに繋がり、ある意味納得のいく話であった。

蒼き光を放つのも…おそらく、我ら犬士を生み出した伏姫様と同じ血を受け継ぐがゆえなのであろうな…この時、そんな事を考えていたが…今はとにかく、この苦境を乗り越えなければならない。

「…」おりましたか、信乃殿

「大角…」

とある晩、行徳付近を流れる利根川の付近で考え方をしていると、古那屋のある方角から大角が現れる。

連れ去られた狹を救うべく、まずは道節に仕えるくの一・単節を偵察に向かわせた。居所を探るのが一番の目的であり、一方で蒼血鬼・ひきたじんのかみもとぶじ墓田権頭素藤らの妨害がないかを確かめる意もあった。

単節殿からの朗報を待つ一方…某と荘助は、道節の口から狹子と彼女が持っていたお守り刀の話を聞いていた。これは、その日の夜の出来事である。

「…疲れませぬか?」

「ああ…。大角もか…?」

「ええ…まあ…」

某と大角は、空を見上げながら、そのような事を口にしていた。そして一呼吸程置いた後、大角がこちらを向いて口を開く。

「信乃殿、一つ…確かめたい事がござります」

「確かめたい…こと…?」

彼の思わず台詞に、某は首をかしげる。

「貴方と…そして、狭…浜路姫様の事です」

「！」

狹子の名が出た途端、某の表情が少し強張る。

そんな己を横目で見つめながら、大角の話は続く。

「…貴方は、彼女の事をどのよにお思いか？」

「…？」

何を訊くのかと思えば…予想だにしない問いであった。

「…」

某はほんの僅かな間だけ、黙り込んで考える。

「共に旅してきた同志…仲間といつた所か」

「…本当にそれだけですか？」

「え…！？」

この時、大角の顔からいつもの穏やかな笑みが消えていた事に気が付く。

そして、彼から食い入るような眼まなこで見つめられながら、時は過ぎていく。

「あの娘は、亡き許嫁と顔立ちがそっくりだが…とても芯の強き女子で…」

独り言のように呟く某の頭の中には、明るい笑顔を見せる狹。泣き叫んでいる所等　　喜怒哀楽を示す彼女の姿が浮かんでいた。

『ありがとう…』

そして、最後に浮かんだのは…一筋の涙を流しながら笑顔を見せる、暖かい微笑みであった。

心の臓が強く脈打つておる…。しかも、その脈も速くなりつつある…。これは…

「狭…」

彼女の名を口にした時、某は何かを悟ったかのように空を見上げた。

「…わたしが何を申したかったのか…。諭していただけたかと思います」

空を見上げる某を横目に、大角は穏やかな表情で語る。

彼に問われ、はつきりと悟つた己の気持ち。同志や仲間としてだけではない、莊助のように義兄弟としての感情にもあらず…。前向きであり、明朗快活…。そして、純粹な精神を持つ彼女を、恋い慕つていた事を

「…大角」

「…何でしょう?」

己の元から去ろうとしていた大角を、呼び止める信乃。

大角の方に向きなおした某は、まるで宣言するかのように口を開く。「某は、狹の事を好いてある。…故に、何があるともあの娘を魔の手から救い出したい…！…これは、彼女が里見の姫ゆえとか…そのような事は関係なしに…じゃ…！」

そう言い放つ某の瞳には、強い焰のよつな眼差しを宿していた。

そんな己を見つめて黙り込む大角。すると、普段の穏やかな笑みに戻り、閉じていた口を開く。

「それを聞いて安心致しました…」

「大角…？」

「おそらく、この先…我々には更なる危機が訪れるやも知れぬ。しかし、貴方のように、恋い慕う者…「守りたい」と思う者がいれば、人は何倍も強くなれる…という事です」

そう告げた後、彼は古那屋の方へと戻つていった。

大角…まことに、かたじけない…！

某は、大角のおかげで狹への気持ちを自覚する事ができた。これまで、許嫁だった大塚村の浜路の事が、やはり忘れる事ができなかつた。しかし、狹が敵に攫われ、その身が危ない事。そして、先ほど の会話によつて、某の心は決まったのであつた

「犬士達はあるか！…？」

その翌々日、古那屋にいる犬士達の元に、政木狐われわれが現れる。

「政木狐…。そんなに声やかましくせんでも、聞こえてあるわ

あまりの大声に、ため息交じりで呟く現八。

しかし、そんな彼の台詞を完全に無視していた狐は、某の存在に気が付くと、すぐさま近寄つてくる。

「んな事より、朗報や！…浜路姫の居所がわかつたんや…！」

「本當か！？」

それを聞いた途端、その場にいる全員の表情が変わった。

「しかし、政木狐よ。そなた…犬江親兵衛とやらと共に、京へ向かつていたのでは…？」

狹の居所がわかつたのは喜ばしいが、某はこの狐が何故この場にいるのが不思議でたまらなかつた。

「ああ…。実はな…」

ドカカツ ドカカツ

その後、行徳を出た犬士達は、とある場所へ向けて馬を走らせる。行徳を出立する前

までの経緯を語つてくれた。

彼の話だと、京から安房国へ戻る途中、妙椿ら敵方の動向を探つていた单節殿と偶然会いまみえる。そこから親兵衛の案により、政木狐を行徳にある我々の所に向かわせ、親兵衛と单節殿に敵の元へ乗

り込む事となつたという内容である。

政木狐の話だと、单節殿は手負いだったといつ…。鬼の血を引くならば、傷の治りも早いと思っていたが…

某達は、道筋から「鬼の忍びは我々よりも強靭な肉体を持つ」と聞いてはいたが、何故か妙な胸騒ぎを感じていた。

しかし、その妙な胸騒ぎは、嫌な意味で的中してしまつ。

「单節さん…」

眠るように息を引き取つた单節殿を見下ろしながら、涙を流す狹子。行く途中で通りかかった海岸で、妙椿の刺客に襲われている彼女達

を見つけた某達。莊助達にはすぐに彼らの加勢に向かつてもらい、某はその場にいなかつた狭を必死で探した。

「狭つ！！！」

ついに見つけ出した時、狭は墓田素藤と共にいた。

「信乃つ……！」

そう己の名を呼ぶ彼女は、素藤に抱きすくめられ、その腕から容易に逃れられない状況に陥つっていたと思われる。

特に怪我をしていないようなのでそこは安心したが己の頬に狭の頬を近づけ、見せつけるかのように抱きしめる敵の表情を見た途端、無意識の内に怒りを感じていた。

その後、狭子を奪い返すために、某は素藤との死闘を繰り広げる。完全な勝利はできなかつたが、何とか狭を取り返す事に成功した。この時は、再会できた喜びでそれ所ではなかつたが

今にして思うと、狭が身を挺して素藤を止めようとした際、彼女にとつて素藤は単なる“敵”ではなくなつていたのやもしない。妙椿の刺客を退けた後、鬼の弱点たる蒼血鬼の血が塗られた武器で致命傷を負つた单節殿は、双子の姉・曳手殿の腕の中で息を引き取る。“忍びは人にはらず”

“死ぬ時は独り”という撻のある彼女達に涙を流していた狭をとても愛おしく感じた某は、黙つたまま彼女を抱きしめる。

身近な者であるうがなからうが…尊い命が失われる事は、誠に悲しい…。そして、多くの命が犠牲となる“戦”…。守るべき者のためとはいえ、早くこのよつた悲しい出来事がなくなるよう努めなくては…

某は声を押し殺して泣く狭を抱きしめながら、これから待ち受けているであろう大戦への心を強く固めるのであった。

「それでは、各自…明日より、各地へ展開してもらいたい！」
「御意！」

狭を助け出した後、我ら犬士の一行は安房国・里美家の本陣がある滝田城を訪れた。

兼ねてより里美家の棟梁・里美義実公から家臣として認められた某達は、戦での防衛使を勤める事と相成った。その戦の相手は、こが足利成氏あしかがのしげうじ公や関東管領・扇谷定正おうや さだまさを要とする連合軍。

道筋からの報せによると、この戦を起こすために画策していたのが妙椿と名乗る尼僧と、白髪の鬼・墓田素藤おみた そとうだという。しかも妙椿とは、里美家に滅ぼされた領主・山下定兼の妻であつた玉梓なる者が怨霊として現世に現れた存在だという。

因果が巡る…とは、まさにこの事を申すのであるうな…

某は、己が防衛使を勤める事となつた國府台こうのだいへ向かいながら、そのような事を考えていた。

そして、戦いの火蓋が切られ、この地に赴いた某・現八・親兵衛らは戦いに身を投じていく。狭の奪還を通じて、8人目の犬士である事が発覚した大江親兵衛おおえ しんべえまさ仁。年は13か14程と年若いが、京で見せたという活躍や、最初に彼女の奪還を成功させた童なだけあり、同じ犬士としてとても頼もしかつた。

「けが人を癒すため」として行軍に加わってくれた狭のためにも必ず、この地を死守してみせる…！！

馬にまたがつた某は村雨丸を駆使して、襲い掛かる敵を次々となぎ倒す。戦場は、村雨丸からほとばしる水柱が、この戦場を舞う。現ハや犬兵衛も足軽隊として彼らの前を先導し、確実な一撃と素早い動きで敵を翻弄していく。

「あれは…！？」

しかし、優勢かと思われていた最初の戦も、敵方の新兵器によつて苦戦を強いられる事となる。

後に狭からその兵器の名を教えてもらつ事となる。彼女の話だと、その新兵器は駒馬二連車くまばさんれんしゃといい、大陸にある国の戦車を真似て作つた戦車だという。大八車みたいなものを3つ連ね、前と後ろにそれ

ぞれ鉄砲と弓矢を持つた6人の兵がそこに乗り、御者は左右に2人と騎馬が6頭。馬にもそれぞれ、薄鉄の鎧が着けてあるという代物。

戦のさ中、我ら里美軍は「それ」を目の当たりにするのである。

「犬塚殿！！わが兵は馬兵と足軽隊で組まれております！！」のま

までは、圧倒的に不利です……！」

兵の一人が某に進言する。

「つ……！」

周囲を見渡すと、駒馬三連車を前にもろくも崩れる自軍の光景が目に入ってくる。

確かにこのままの進軍は、絶対的に不利…。しかし、敵に背中を見せれば、追い討ちに遭つて全滅する可能性も…

兵達にどのような命を下せばよいかと困惑する信乃。しかし、時は一刻と過ぎ、本当に撤退をせねばいけない状況に段々陥つていく。

「信乃！！！」

「現八……！？」

すると、全身が傷だらけの現八が某の元に現れる。

「わしが殿を勤める……その間に……早く兵を退かせるんだ……！」

「……！」

その台詞を聞いた途端、目を丸くして驚く。

しかし、戦況が不利なため、某の心も揺らいでいた。

「早くしろ……このまま全滅させる気か……！」

鬼気迫つた現八の表情を見た途端、考える暇などない事を悟る。

「まもなく夜が更ける……一時、撤退せよ……！」

某の合図と共に、里美軍は撤退を開始する。

現八……死ぬなよ……！！！

殿を務めてくれた現八が無事に戻る事を願いながら、某や親兵衛の軍は撤退を始める。国府台での戦い初日は、里見軍に多大な被害を与えて終える事となつた。

その後、文明の岡に陣を移す事となる里見軍。絶体絶命の危機に陥つていたが、狭の元に里見家一の姫であり、我らハ犬士の産みの親である伏姫の神靈が現れる。彼女が狭をこの時代に誘つた張本人である事を悟り、実の姉姫にあたるという事実は、不思議な心地がした。

また、伏姫様は、劣勢のわれ等に「火猪の計」という策を授けてくれた事により、戦況が一変。里見軍による逆転劇が始まるのである。そして、勝利への光明が見えてきた矢先 狹子の元に魔の手が伸びていたのである。

第3話 守るための戦い（後書き）

いかがでしたか。

今回は恋愛模様もあれば、戦場面もありで、まとめるのが大変でした。

…そして、やはり3話分ではまとまりきれませんでした(Ｔ○Ｔ)
信乃は本編でだと準主人公的な立ち位置にいるので、彼視線で描く
と、いろいろ載せられる事が多い・・・。
とまあ、こんなかんじですが、とりあえず随想録1の信乃編はもう
少し続きます。

ご意見・ご感想があれば宜しくお願いいたします！

最終話 狹子の幸せを願ひて（前書き）

”最終話”とありますから、この章が最後なだけであり、隨想録が終わるわけでもないのです。

最終話 狹子の幸せを願つて

「はあああつ……」

馬にまたがりながら、某は村雨丸を振るつ。

神靈・伏姫様が授けてくださつた神猪の活躍によつて、形勢を一変させる里見軍。某も先陣を切つて敵をなぎ倒していく

優勢に変わつてきた矢先、某の元に一人の足軽に装つた里見の忍びが現れる。

「犬塚殿、一大事でござります」

「…如何した」

「実は…」

忍びによる報せを聞いた某は、急ぎ滝田城へと馬を飛ばす。

国府台を出立する少し前

「狭…否、浜路姫が…!?!?」

里見軍の陣に戻つた某は、狹子と共に滝田城へ向かつていたという政木大全孝嗣まさきだいぜんたかつぐからの報せを聞いて驚く。

「はい。義実よしのぶ公の訃報を聞き、某と城へ早馬を走らせておりました
が、不覚にも某は氣絶させられてしまい…気が付けば、姫のお姿があられなかつた次第でござります!!!」

「貴様…そのお方は、殿より御身を預かりし姫…! 護衛もできず、
何という不始末…!!」

「申し訳ございませんつ…!!」

某の側にいた里見家の家臣が、大全を責める。

しかし、彼の口調を聞いていれば、本当に責任を感じているのがよくわかる。

「…過ぎた事は、致し方ない。…だが…」

右手の拳を強く握りしめながら、某は重たくなつた口を開く。

「姫の救助には、某が向かう…! 大全、お主はそれを現ハや親兵衛

に伝え…けが人への尽力を頼む！』

「御意！！」

落ち着いた口調で彼らを宥める一方、某の胸中は慌てていた。

大全は連合軍方の忍によつて、狭が連れ去られたと申していたが…。だが、成氏公や管領殿は彼女の顔は知らぬはず…。故に、これは…！！

馬を走らせながら、某の頭の中には妙椿なる者の名が浮かんでいた。…里見家を恨み、処刑された玉梓たまざわが怨霊…。忍を差し向かたのがそやつならば、彼女の連れて行かれた場所は…！！連れ去られた狭や敵の事を考えながら、某を乗せた馬は山道を駆け抜けていく。

「狭…よく…よくぞ頑張ったな…！」

これは、滝田城に向かつた某が狭を助け出した時に述べた台詞いとば。あれから滝田城へ参つた某は、狭から放たれた蒼き光と村雨丸の力によつて、敵である玉梓の怨霊を滅する事ができた。しかし、莊助から受け取つた狭の身体には無数の切傷があつた。玉梓によつて怪我を負わされた彼女は、多く血を失つたためか意識を失つていたようだ。

女子が鎧を身にまとう事さえまれなのに…狭はこの小さき身体で痛みに耐え、ましてや敵である玉梓をも説得しようとして…この華奢で小さき身体に、如何なる程の強さを持つているのか

狭の身体を抱きかかえながら、某の胸中はそんな想いでいっぱいになる。

その後、薬師の元に送り届けた後、祈るような想いで眠る彼女を見つめ続けた。

やはり、狭が助からないのではないか…と思つと、誠に胸が痛くなるものだな…

義実公の家臣として戦の講和条約が結ばれる場におつた時も、某は狭の事で頭がいっぱいであつた。

先の戦いで足利成氏公や扇谷定正らと戦い勝利した里見軍は、領地や賠償金は求めずに条約を締結させる。それは、「安房国を争いのない平和な国にしたい」という義実公たつての願いであった。

こうして、狭が後に申していた大戦・“関東大戦”が終わり、安房国には平和が訪れる事と相成る。しかし、某には未だ燻ぶつている想いと、未だ明かされていない狭子の前世なるものという問題が待ち構えていたのであった

狹：某は…！

とある晩、某はいろんな事を考えていたため、なかなか寝付けなかつた。というのも、今から少し前、狭子ひきたもじふじが墓田素藤によつて攫われたからである。

怪我が治つた後、狭は姉君にあたる静峯姫しづあが入手した特殊なお香によつて、前世の記憶が蘇る。「内なる何かを思い出す」という逸話が誠であるとは誰も考えておらなんだゆえ、その場にいた里見の姫君達や、報せを聞いたハ犬士われわれも驚いた。そして、気を失つて眠つていた彼女を、素藤が富山へと連れ去つてしまつたのである。

ん…？

眠るに眠れなかつた某は、突然何やら変わつた気配を感じ始める。

「…誰かあるのか？」

周囲を見渡しながら、その言葉を口にする。

しかし、人という氣配は全く感じられない。部屋の外から聴こえる風の音しか周囲にはなかつた。

気のせい…

そう思つた某は、再び床に就こうとしたその時であつた。

『信乃…』

「…？」

聞き慣れぬ声が聞こえた途端、某は目を見開いて驚く。

そんな己の名を呼んでいたのは

柿のよつな色

の髪をし、所々ちぎれた着物を身に着けた男子^{おのこ}がいた。しかし、その姿は神靈の『』とく透けて見える。

「そなた…何者だ？」

疑惑の瞳^めでこの者を見上げる。

『俺の事はいい…。それより、あいつ…狹子を…』

「狹を知つておるのか！…？』

考える間もなく、この靈らしき者が狹を知つている事によつて、ますます頭が混乱してくる。

…だが、この顔…。もしや…？』

「そなた…染谷純一…なる若者か…？』

恐る恐るその名を口にする。

あまり詳しくはないが、狹から聞いた事がある。彼女は幼き頃から本当の親の顔を知らず、孤児院なる場所で育つたと…。そして、その孤児院とやらから共に飯を食い、親しくしていた男子^{おのこ}がおつた事を。そして、犬士探しの旅の道中にて、素藤が申していた“染谷純一”なる者であつた事を知る事となる

「じゃが…何故、某の名を？」

『…』

そう問うた瞬間、染谷とやらの靈は複雑な表情^{かお}をしながら遠くを見つめる。

『それよりも…だ。お前、狹の前世が、あの蒼血鬼の想い人だつたつて事は知つているか？』

「しつて…？」

聞き慣れぬ言葉に、某は首をかしげる。

しかし、“あの蒼血鬼”^{ひきたもとふじ}が墓田素藤である事だけは理解できた。

『俺は、あの鬼…今は墓田素藤^{ひきたもとふじ}という俺の名を継いだ奴の事を知つてゐる。…奴がどれだけ、琥珀つて女子を想つていたのかも…』

「…！」

狹が申していた、前の世を生きていた女子の名…！

“琥珀”という名を聞いた途端、某の表情が強張る。

『あいつに世話をなつた俺としては、幸せになつてもらいたいと願つてゐる。…だが…！』

「…だが…？」

某は、彼が申す事を静かに聞いている。

…妙椿の事もあり、素藤を敵としてか見ていなかつたが…このようにて、気に掛ける輩もいようとはな…

彼の話を聞きながら、某はそんな事を考えていた。

「最終的には、狭子にも幸せになつてほしい…と願つてゐる。しかし、あいつは今、“琥珀”としての己も思い出した…。きっと、今の自分の事もあつて悩んでゐる…！」

「純一…お主…」

彼の口調は、冷静そうに見えてとても必死そつた眼差しを持つていた。

おそらく、狭の事を好いていたのだろう

だが、靈

として現れたという事は、もうこの世の者ではないという証。恋慕つていても、触れるこすら叶わない身となつていての事実がひしひしと感じられる。

『だから、犬塚信乃！あんたも狭の事が好きならば、あいつが何を望んでいるのか…どう在りたいのかを確かめてほしい！狭にとつて、お前と蒼血鬼のどちらと共にするのが幸せかを…！…』

「狭の…幸せ…」

『俺にはそれはできない…。あいつの事を見つけたかったのに、あいつより先に死んでしまつたから…』

そう言つて俯く純一を見た途端、胸が締め付けられるような気分となつた。

その後、幾何かの時を沈黙が続く。

「…相わかつた。染谷純一の靈よ…」

『…』

最初に口を開いた某は、己の両手を見つめながら話を続ける。

「某とて…もう、あの娘が悲しむ顔は見とうないからな…。それに、

何があつても守り、幸せにするとこの命に誓つた……

狭の前世とやらについてであつたり、素藤をどう見ているのかな

ど…揺れ動く想いがあつたが…

いろんな想いが交差していたが、今日の前にいる靈との対話で、某の決心がついた。その表情を見た純一は、安堵したのか、少しだけ微笑みの色を見せる。

『…頼むぜ、ハ犬伝のヒーロー…！』

意味不明な台詞を告げた彼は、その場から姿を消した。

染谷純一の靈が何故現れたのか、いろいろと残る疑問はあつたが…

この時の某は、狭の事で頭がいっぱいであった。

待つていてほしい…狭…！！

強い想いを胸に抱きながら、某は夜を過ぐす。そして、“始まりの地”とも言える靈山・富山へ向かう事となるのであつた

「信乃…どうしたの？」

己の住まつ場所となつた東条城の本丸から安房国を眺めていた某は、後ろからやつてきた狭に声をかけられる。

「いや…。これまでの事を少し…思い返していたのだ」

「そつか…」

すっかりこの時代の服装を着なれた狭が、某の隣に立つ。

「本当に…いろいろな事があつたよね…」

「ああ…」

某の隣に立つた彼女もまた、安房国の景色を眺めながら呟く。

富山では、思わぬ事實を聞かされて困惑したが…素藤やつとの戦いがあつて、今の暮らしがあるようなものだからな…

あれだけ敵対していたのに、今にして思うと…ただの悪人ではなかつたのかもしれないと某は無意識の内に考えていた。

「狭…」

「ん…？」

彼女の名を呼び、これまでに起きた出来事が走馬灯のようにな蘇る。
「父・番作の死から今まで…まことにいろいろな事があつたが…今、
これだけははつきりと言える」

「信乃…？」

某が真剣な表情をしているのに気が付いた狭は、何を言われるのか
待っているような表情をし始める。

己の心臓が強く脈打つてはいるが…心からそう思える言葉を口にし
ようとする。

「この先、如何なる事が起きようと…某が、そなたと共に生きて
いきたい」

「信乃…！」

「…愛している」

狭が口を開くのを遮るようにして、彼女の華奢な肉体を抱きしめる。
某は、彼女が教えてくれた“先の世”で使われている想いを告げる
言葉を口にした。抱きしめる腕を少し緩めた時…頬を真っ赤に染め
ながら、照れているような表情を狭が見せる。そんな彼女を見た某
は、心から愛しく想い

　　彼女に接吻をした。それは、
後で恥ずかしくなるくらいに強く、厚いものであった。

その後の詳細は、文面で書くのも恥ずかしいくらいな出来事であ
つたため、あえて記さないでおこう。こうして、狭との出会いから
今日までの事を書き綴った書物を、棚の奥底にしまいこむ。それは、
彼女に「これ」の所在を知られないようにするためであった。

里見の犬士として戦の世を生き、生涯の伴侣ともいえる女子と出逢
えた事

それが、この書物に記した某の隨想録であつ
た

最終話 狹子の幸せを願つて（後書き）

如何でしたか。

ここで出てきた染谷純一とは、「蒼き牡丹」の主人公・三木狹子の幼馴染で、作者によるオリジナルキャラ。彼についての詳細は、「蒼き牡丹」をご覧ください

さて、とりあえず犬塚信乃編はここでおしまいです。

第2章も犬士の話といきたいですが…信乃ほど話が続く人物は少ないでの、どうしようか試行錯誤中です。

「犬鬼人」というタイトルにある「鬼」と「人」の話は浮かんでいるのですが、登場人物順で書きたいので、もう少し後に…
とりあえず、考え方付いた構成を今はまとめている最中だつたりします！

外伝ですが、ご意見・ご感想があればよろしくお願い致します（^_^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9061x/>

犬鬼人隨想録～蒼き牡丹外伝～

2011年11月17日19時06分発行